

ドリルについて -1: 漢字ドリル「指導と評価：2004.8連載 1 回目の下書き」

忙しいと、ついつい手を抜いてしまいます。自分で検証すれば直ぐに分かることなのに、体裁だけ整えて工夫ではなく手抜きをしてしまいます。そして、自分でも気付かないうちに子供達に無用の負担を強要してしまいます。このようなことがないように、私は、子供達に提供するものは必ず自分で検証して使うことにしています。また、どんなに効果的でも副作用が強いもの（考えない習慣を付けてしまうもの）は絶対に使わないようにしています。子供の財産とはならない目の前の成果より子供の未来での効果が重要だと考えるからです。自戒の意味も込めて、ここで手抜きと工夫の違いを再確認したいと思います。今回は漢字ドリルです。以下は注意点です。

1. 入力のための「読み」については制限を設けない。
2. 出力のための「書き」については制限を設ける。
書けることがスゴイことだと思わせてはいけなく考えるからです。
3. 「読み」と「書き」は異なる学習方法を採用する。
学習効果を考えると自然に異なる学習方法になりました。
4. 「読み」の中心は「スラスラ発音できること」ではなく「直ぐに意味が分かること」と考えてスラスラと発音できることに固執しない。意味は話の流れの中で理解することが最も自然で簡単であることを活用する。
5. 「書き」の中心は「正確なこと」ではなく「バランスをとれること」と考えて「止めハネ」に固執しない。「筆順」は絶対的なものではない（書体で異なる場合もあるし、硬筆・毛筆で異なる場合もある）ので、意識しなくても自然に身に付くように工夫する。教師の手抜きを反復練習という生徒の努力で補わせるのは責任転嫁だと思っています。

以上のことを、具体的な形にしたものが『漢字読本』と『全手本漢字練習帳』です。

『漢字読本』とは、年間配当漢字を一つの物語の中に全て織り込んだ一つの物語です。基本的には漢字の「読み」の練習に使いますが、確認テストとしても使えますし、音読用の副読本としても使えます。漢字読本の使い方（音読用・読み用・書き用）は「絶対学力（文春ネスコ）」で紹介しています。作り方はHPで紹介していますので、ここでは一年生の「本文・読み用・テスト仕様」を紹介します。

一年生 「権兵衛の村」

むかしむかし、あるところに右の目玉が金色に光る大きな大きな犬がいました。その目は、どんなに遠くのものでも見ることが出来ると言われていました。その犬は、小さな子供が大好きで、いたずらも大好きな犬でした。名前は権兵衛といいました。権兵衛は、毎日、月が沈み日が昇ると直ぐに天空を見上げ、大きな口を開けて大きな声でウオ～っと一声吠えました。それから、森や林を駆け抜けて、その村で一番高い山へ行って木に登りました。権兵衛は、木登りも出来る不思議な犬でした。木の上からは、田んぼや川や竹やぶなどが見えました。いつもは、この木の上で昼寝をしながら、いたずらを考える権兵衛でしたが、その日は違いました。草むらの中から、虫の王様と呼ばれている左足の青い円形の虫が出て来たり、土の中の石が貝殻のように白く光ったり、夕方にしか咲かないはずの花が朝早くから咲いていたり、いつもとは違っていたのです。権兵衛は、とても嫌な感じがして、どうしても眠れませんでした。そのうちに、権兵衛の耳に糸のように細い雨が降って来ました。そして、パチパチと何か燃える音が聞こえて来ました。ハッとして山の中腹を見てみると、何と真っ赤な火が町の小学校に迫っているではありませんか。大変だ、と思う間もなく、その火は、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十と数を増やして小学校に迫って行きます。大きな大きな山火事だったのです。権兵衛は、木の上から、この山火事のことを村の人に大声で知らせようとしたのですが、朝早いせいか、村の人は、なかなか気づいてくれません。幸運にも、今日は、学校がお休みなので先生も生徒も学校にはいません。でも、子供達の学校が燃えてしまったのでは大変です。権兵衛は力いっぱい吠え続けました。下に見えていた火は山の上にも迫って来ていました。何百回、何千回と権兵衛は吠えました。村の人が、やっと気づいてくれました。消防車に乗って村の人がやって来ました。でも、山の道は火に邪魔されていて車では通れません。そこで、権兵衛は消防車の代わりに村の人を乗せて何度も何度も火の所まで走って行ってあげました。男の人も女の人、村の人みんな手伝って水を運びました。夕方になって、ようやく火事は消えました。権兵衛の活躍のお陰で、村の人は山火事を消すことができたのです。村の人達は本当に権兵衛に感謝しました。そして、次の年のお正月に大きな文字で権兵衛の村と書いた立て札を村の入り口に立てました。（おわり）

この一つの物語で一年生の漢字+ の読みができます。こうすると、一学年分を一日で修得することも可能です。すると、教科書は一日で全て読めることとなります。音読の範囲を限定する必要は無くなります。また、全学年分を学年に拘らずに使用すれば音読の練習を兼ねて4年生くらいで全学年

分の漢字を無理なく修得できます。

注意：「読み用」の答え（読み仮名が書いてあるもの）は必ず同じページの下半分を使います。裏に答えを書くと答え合わせに数十倍も時間がかかります。点線から折り曲げて練習し、開いて答え合わせをします。答えが縦のライン（行）で揃っていますので確認する場所は直ぐに分かります。

『全手本漢字練習帳』は「読み仮名＋熟語」付きの読みアリ版も作りました（「新・絶対学力」p.88）が、漢字読本と読みナシ版を使う方が効果的ですので「読みナシ版」を紹介します。以下は注意点です。

「なぞり書き」を使わない

なぞり書きは一見良さそうですが、なぞり書きをしている時に目はお手本を見ていません。つまり、線に沿って書いているだけで、漢字の練習にはなっていないのです。また、全体を意識しにくい方法です（バランスを考えなくても書ける）ので漢字練習には不向きな方法です。

お手本を上には書かない

お手本は常に真横（左）に見えるものでないと非常に見づらいものです。「見づらい」と「見なくなる」のは当然のことで、ドリルを出す方が工夫して解消すべきことの一つです。見づらい理由は、漢字のボトムラインが移動してしまうからです。手本を横にしておくと練習する漢字のボトムラインはお手本と同じラインを使えます。これが、お手本は必ず横に置いておかなければいけない理由です。縦書きの文章だからといって縦に（上に）お手本を書くのは大間違いです。

練習欄の横には全てお手本を書いておく

同じ漢字でも常にお手本が横にあるように全ての練習欄の横にお手本を書いておくことが基本中の基本です。お手本が一つで複数の練習欄を使うと、練習欄は練習する漢字の分お手本から離れていきますので、お手本を見ないで書くようになってしまうからです。

練習欄とお手本欄は同じ大きさにする

練習する字の大きさとお手本の字の大きさが違っているとバランスが分かりづらいので歪な字になってしまいます。漢字はバランスが美しさを作り出します。そのバランスを自然に体感するためには同じ大きさのお手本が必要不可欠なのです。

分割された書き順を使わない

分割書き順は、子供達に多くの無駄な時間と負担をかける最も不便な方法です。見た目はいいのですが、実際に書く時には役に立ちません。また、止めハネを言葉で書くのは手を止めさせるだけでなく注意力を散漫にさせますので止めハネは全て記号で表示しておく必要があります。つまり、書き順は一マスの中で瞬時に確認できるように全てのお手本に数字と矢印記号を使って表示すべきなのです。こうすることで、毎回書き順を目することができ、無理なく無駄なく正しい書き順を自然に身に付けることができるのです。

分割された書き順は、辞書でさえも20画なのに8字しか示されていないもの（例えば「競」）もあります。これは省略ではなく酷い手抜きです。

同じ漢字の練習を何回も続けない

全ての練習欄の横にお手本を書いておけば複数回の練習も悪くはありませんが、それでも編だけ先に書いたりする子が出てきたり、量が多いこと自体が嫌になり漢字を味わう感覚が無くなります。そこで、同じ漢字の練習は多くても2回までとします。

漢字練習欄の大きさは1.5~3cm前後

漢字練習欄の大きさは細部を感じ取れて、尚かつ瞬時に全体を一目で認識できる大きさである必要があります。低学年では一辺が3センチ前後、高学年でも一辺が1.5センチ前後が理想的です。

このような考察から「一文字書くときには、顔は不動で視線は横移動（お手本と練習欄は横並び）、手（指関節）は縦移動が自然であり、細部と全体を体感できる大きさでお手本と等しい升目を使い、毎回全ての書き順を一瞬で確認できて飽きない漢字練習帳」が必要だと分かります。また、時間が余っているのであれば簡単に出来る「一文字書道」などで「書き」の楽しさを味わえるように工夫することも大切でしょう。「一文字書道」は実に簡単でとても創造的です。自分の名前から書かるととても興味を示します。

§ 何のためのドリルなのかを明確にする

何のためのドリルなのかを明確にしないと、どんなドリルがいいのかは判断が出来ません。漢字ドリルは漢字を覚えるためのものではありません。漢字ドリルは正しい漢字を記憶に留めるためのものです。そのために、文章の中から漢字だけをピックアップして目立たせ印象に残るようにしてあるのです。そして、なぞり書きをしないことも、全ての練習欄の横にお手本を置くことも、自然に何度も

正しい漢字（お手本）を目にするようにするための工夫です。どんな形のドリルが自然にお手本を数多く目にするかがポイントなのです。

多くの意味や熟語を理解の助けとするために紹介するのは結構ですが覚えさせようとしてはいけません。効果よりも害が大きいからです。理解の助けにはなるが使える知識にはならないからです。漢字を理解させるときに、よく成り立ちを説明しますが、成り立ちそのものを全て覚えさせようとしている人はいないでしょう。熟語・類語・諺なども同様です。教える内容と覚えさせる内容とは別に考えるべきなのです。確かに、漢字の成り立ちや共通点を通して漢字を理解させる授業は楽しい授業を作りやすいので、特に導入期には効果的ですし、有益でもあります。しかしながら、本筋ではありません。

§ どうして漢字を教えるのでしょうか

漢字を教えている時に「どうして漢字を教えるのだろうか」とふと思ったことがあります。私の結論はこうです。全文をひらがな（表音文字）だけで表記された文よりも漢字が混在している文が格段に分かりやすいからです。では、なぜ、「分かりやすい」のでしょうか。瞬時にイメージが再現できるからです。「いぬのさんぽ」と書いてある文を読む時間よりも「犬の散歩」と書いてある文を読む方が時間は短くイメージの再現も速いのです。「分かる」とはイメージを再現できるということです。ですから、漢字学習の本筋は漢字からイメージを再現することが出来るようにすることなのです。漢字を書けるようにすることではないのです。普通は文字（漢字も含めて）から音を導き、音からイメージを再現しますが、漢字は音を介さなくてもイメージを再現することも往々にしてあります。表意文字の特質ですが、表記方法が簡略化されていくことを考えると、他の文字と同様に音を導く記号と考える方が一般的です。あらゆる文字は音を導き、イメージを再現するためにあります。イメージを再現することで私達は「分かる」状態になります。イメージ（特に視覚イメージ）を感じる（見る）ことで「分かる（理解する）」のです。ここまでが思考力養成の第一歩です。この「分かる・理解する（イメージ再現）」の後に「考える・工夫する（イメージ操作）」、「解く・判断する（イメージ抽出）」と続きます。小学校の間にこの3つのことが出来るように育てなければなりません。ですから、余計なことをしている時間はありません。全ての時間（全教科）を使ってイメージの再現・操作・抽出を意識的にさせなければいけないのです。こうして、子供達の頭に思考力が育つのです。全ては考えるためにあるのです。全てはイメージするためにあるのです。全ての漢字を書ける子は漢字テストでは百点ですが、イメージする力がなければ考えることは出来ません。一つも漢字を書けない子は漢字テストで〇点ですが、イメージする力があれば考えることが出来ます。ここを勘違いしてはいけません。一生に一字も漢字を自分で書かなくても何の不都合もないのです。漢字を見て意味するものをイメージすることが漢字力なのです。

ゆっくり書かなければいけない理由

漢字を体感しながら書く方法が最も正しい覚え方です。そして、ゆっくりでないと文字を書いている動きは体感できません。この体感イメージの入力（お手本を取り込むこと）は、単に書くだけでは入力できません。書いているときの指の動きを感じながら、その感覚を覚えようとしなくては記憶に残りません。漢字が体で「分かる」ということです。速く何回も書いて条件反射的に覚えることとは全く異なります。このお手本としての体感イメージの入力はあらゆる学習で共通している最良の方法です。体育の場合は逆立ちの練習で簡単に確認できます。（詳しくは「新・絶対学力」をご覧ください）

漢字学習は、体験と連動して徐々に身に付けるべきものです。ところが、学年配当漢字があるように漢字の学習内容は固定されています。そこで、ついつい学年毎での習熟を目指してしまうのですが、読み書きを同時にさせることは効果的ではありません。

§ 教師の力量は「させないこと」

人間の指先はとても精巧に作られています。訓練次第で僅かな凹凸を読み取り、点字情報さえも高速で入力することが出来ます。この指先の機能は誰もが持っていますが、点字をスラスラと読めるほどの性能アップは普通はさせません。どうしてでしょうか。そこまでの性能アップは不要だからです。「できるからさせる」は基本教育ではないということです。同じ事が漢字や計算でも言えるのですが、対象が漢字や計算になると何の検証もなくドンドンさせてしまう人が大勢います。とても危険なことです。教師の力量は、自信を持って「させないこと」なのです。不要なことをさせて自信を持たせてはいけません。

単純に語彙を増やす場合に効果的なのは「しりとり遊び」です。単語・熟語・諺などを集めたプリントを用意して（高学年なら辞書でも可能）範囲指定をして「しりとり」をします。プリントを見

ながらでもいいことにします。答えることではなく「お手本」を自然に数多く目にすることが目的だからです。

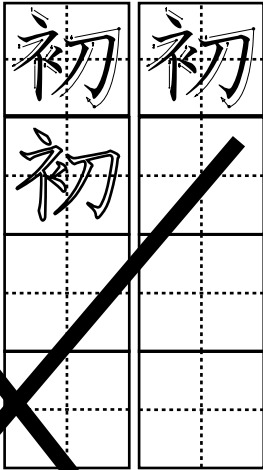
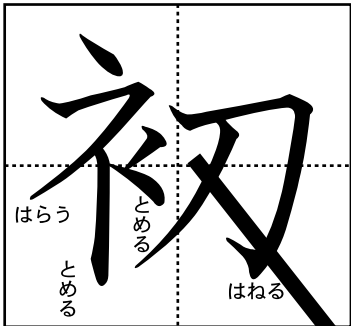
「しりとり遊び」は比較・抽出・判断の力を育てます。また、自然に語彙量も増えます。しかし、それは副産物であって主眼にすえるべきものではありません。

漢字力を「書き」以外で評価する方法

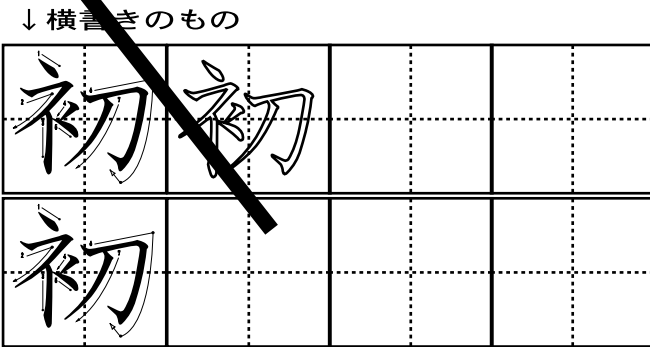
漢字読本を利用した適語選択テストを利用すると漢字を書けない子でも漢字力の評価が出来ます。

「どれカナ漢字読本」は漢字読本から作ったテストですが、書けなくても漢字力を評価できます。

※見た目はいいのですが実用的ではない手抜き例



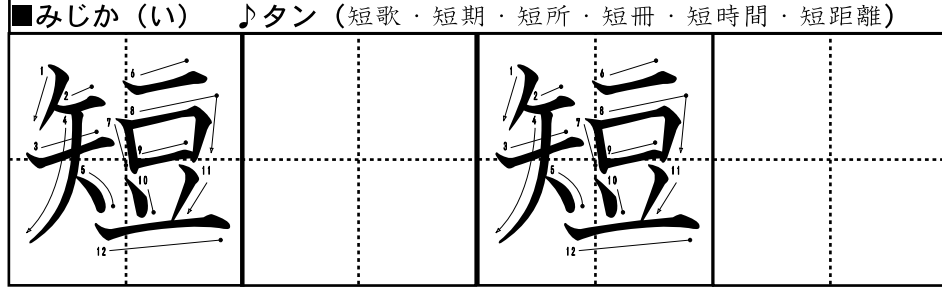
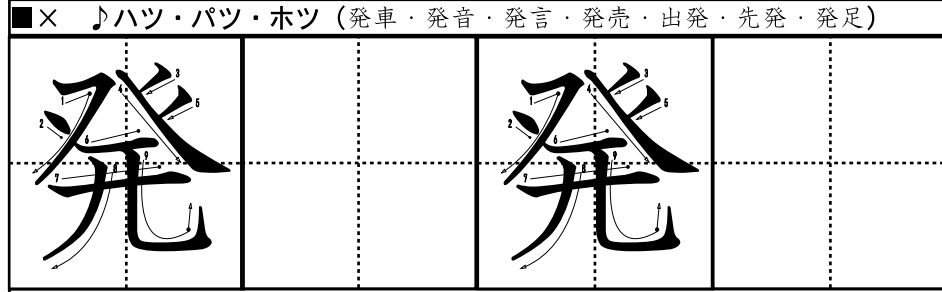
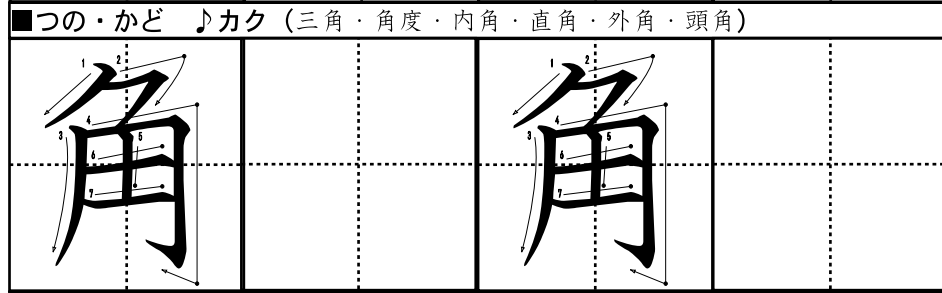
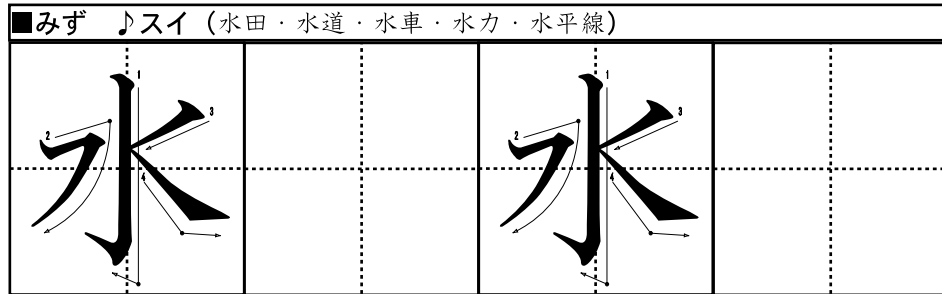
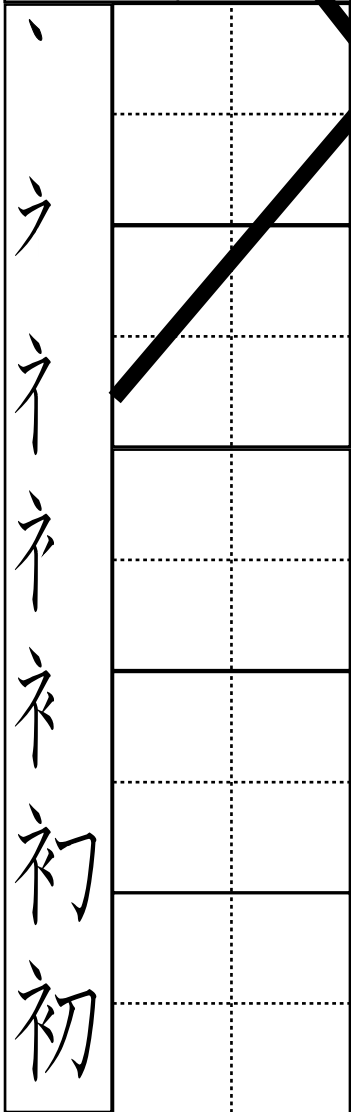
←縦書きのもの
(なぞりがきがあるものと
ないもの)



●それぞれに、一見良さそうですが実は工夫が足りません。

<欠点>

- ※お手本が上にあってはダメ (見づらい→見ない)
- ※お手本と大きさが違ってはダメ (バランスが分からない)
- ※書き順の表し方が面倒なの (一角ずつの書き順表示などは面倒で見ない) はダメ
- ※同じ漢字の練習を何個も続けてはダメ (編だけ先に書いたりする・お手本が離れるので見ない)
- ※「止め・ハネ・はらい」を言葉で書いてはダメ (言葉を読む時間がかかるので筆が止まる)
- ※お手本の漢字が一つしかないのはダメ (自分の書いた漢字を見て書いてしまうので上達しない)
- ※「なぞりがき」は一見いいようですが実は、お手本が段々離れていくのでダメ



- ◎ポイントは全ての漢字練習用のマスの横に筆順付きのお手本があること。
- ※毎回書き順を目にするので無理なく無駄なく正しい書き順が身に付く
- ◎お手本は同じ大きさに毎回真横 (左) に見えるものであること。
- ※練習欄が2つ以上あっても練習は一度に2回までにする
- ◎止めハネは数字と記号で確認できること。(言葉での注は筆を止めます)
- ◆ただし、筆順をあまり気にする必要はありません。硬筆と毛筆では筆順が違うものもありますし、筆順は便宜的なもので実質的には重要ではないからです。
- ◆読みアリ版は熟語などを添えてあるので同じ文字を横に書いてあります。

■全手本漢字練習帳(読みアリ版)

■漢字読本 ■一年生・一枚目・語句

●左の漢字を一回ずつ使って、下の

文章を完成させましょう。

※使った漢字には○をつけましょう。

上 大 大 大 大 大 小 子

日 日 犬 犬 犬 天 右 出

目 目 月 名 見 見 毎 玉

色 遠 来 空 言 供 光 金

好 好 前 兵 兵 沈 昇 直

権 権 衛 衛

■漢字読本 ■一年生・一枚目・テスト

おかしおかし、あるところに

が きんに きなきなが

いました。その は、どんなに

のものでも ることが ると わ

れていました。その は、 きな

が きで、いたずらも きな

でした。 は といいまし

た。 は、 がみ が

ると ぐに を げ、 きな

■漢字読本 ■一年生・一枚目・読み

おかしおかし、あるところに右の
目玉が金色に光る大きな大きな犬が
いました。その目は、どんなに遠く
のものでも見る事が出来ると言わ
れていました。その犬は、小さな子
供が大好きで、いたずらも大好きな
犬でした。名前は権兵衛といいまし
た。権兵衛は、毎日、月が沈み日が
昇ると直ぐに天空を見上げ、大きな

■漢字読本 ■一年生・一枚目・原本

おかしおかし、あるところに右の
目玉が金色に光る大きな大きな犬が
いました。その目は、どんなに遠く
のものでも見る事が出来ると言わ
れていました。その犬は、小さな子
供が大好きで、いたずらも大好きな
犬でした。名前は権兵衛といいまし
た。権兵衛は、毎日、月が沈み日が
昇ると直ぐに天空を見上げ、大きな